

特別展報告
「日本の蝶と自然」
横山謙二



特別展「日本の蝶と自然」8/11 開催初日の様子

8月11日から8月31日にかけて、特別展「日本の蝶と自然」を開催しました。特別展として行いましたが、これは毎年行っています収蔵コレクション展と同じものです。今年の展示標本は、主に本年4月に搬入された小澤至氏の蝶類コレクション（会報37号p.10）の標本を展示しました。小澤氏の蝶類コレクションは、ドイツ箱113箱で約8000頭もあり、今回の展示では、この中から約250種の蝶を展示しました。いずれの標本も、状態がとても良く、日本全国の蝶類のほとんどがそろっている素晴らしい標本です。搬入されてから、まだ間もない標本でしたが、昆虫標本の整理・管理担当の方たちの努力もあって、企画からわずか2ヶ月間で特別展を開催することができました。

展示物の制作準備については、博物館実習生や自然学習標本活用事業で働いてもらっている山田さん、石川さんなど、いつもより多くのスタッフに恵まれ、そのおかげでパネル製作や設置にじっくりと取り組むことができました。その結果、展示パネルが充実し、作製したパネル数は300枚を超えました。正確

にはわかりませんが、これは過去の各ミニ博や収蔵コレクション展のパネル作成数の3倍程度ではないでしょうか。その内容は、各地から集められた蝶の写真や解説文、分布図などです。解説文については、ほとんど高橋真弓先生が一人で書かれたもので、その総字数は約1万6千字にもおよびます。

こうした展示準備にあたってくれたスタッフの努力のおかげで、特別展開催一日前には展示準備を終えることができ、その内容もかつてないほど良いものに仕上がったと思います。そして開催期間中は、たくさんの方に見学されました。見学に来られた方の多くは、蝶に興味を持っておられる方が多く、中には3時間もかけて、見直ししながら見学される方や、開催期間中何度も見学に来られる方もいました。展示物では、やはり解説文の評判が良く、見学の方の中には、解説文を読み「この解説文、本になっていませんか？」と聞かれる方や、高橋先生が書かれたことを知り、一枚一枚写真に撮って帰る方までいました。

18日（土）からは、子供対象にクイズラリーを行いました。全問正解者には、標本のプレ



昆虫の進化や起源について説明を受ける見学者



クイズラリーの景品用標本を作る実習生



クイズラリーに挑戦する子供たち



熱心に見学するかつての昆虫少年たち

ゼントを行いました。景品の標本は、段ボール等を使った手作りの標本箱でしたが、中の標本は日本の国蝶オオムラサキや東南アジアなどに生息する色鮮やかな蝶ばかりで、作製にあたった博物館実習生もほしがるような豪華な標本でした。クイズに挑戦した小学生も、熱心に解説文を読みクイズに答え、きれいな標本をもらい喜んでいました。クイズラリーで用意した景品用標本は、3日間でなくなりましたが、子供たちが喜んでくれて良かったです。また、クイズに挑戦した子供たちが、展示物をよく見て、蝶について知識を深めてくれたことも、このクイズラリーの効果だと思えます。クイズラリーのようなワークシートを用意した方が、展示物をよく見てくれるかもしれません。

今回の特別展では、子供 214 人、大人 529 人の計 743 人の見学者がありました。この数は昨年の「世界のアゲハチョウ展」の見学者総数を超え、これまでのミニ博・収蔵コレクション展の見学者数の最高記録を達成しました。見学者数にこだわるつもりはありませんが、多くの方に見学してもらえたのは、

うれしいものです。

見学者の傾向として不思議なことに、土日の見学者数が平日よりも少ないという傾向にありました。また、夏休み期間中でしたが、見学者は子供の数より大人の数が多いという傾向があり、特に少年時代に昆虫採集をやっていたという年配の見学者が多く、熱心に見学される方がほとんどでした。その一方で、中学生から大学生にかけての世代の見学者は、ほとんどいませんでした。なぜでしょうか？学生は自然に興味がないのでしょうか？博物館実習に来ている学生を見ていると、決して自然科学に興味がないわけではありませんが、これまでに、あまり自然について学ぶ機会がなかったようです。若い世代にとって学校教育もそうですが、自然史博物館のように、自然について学べることのできる環境づくりも必要なかも知れません。2年後オープン予定の自然史博物館の活動拠点施設は、いろいろな世代が集まり、学び、研究活動も行えるような場所になってくれることを期待しています。